

いわくらじんじゃ  
 石座神社遺跡

所在地 新城市大宮  
 (北緯34度55分38秒 東経137度31分10秒)  
 調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線  
 調査期間 平成20年6月～平成21年3月  
 調査面積 5,200㎡  
 担当者 宮腰健司・早野浩二



調査地点 (1/2.5万「三河大野」)

調査の経過 本調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線にかかる事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成20年6月～平成21年3月、調査面積は5,200㎡である。

立地と環境 石座神社遺跡は、豊川中流域右岸の上位段丘面上に立地する。段丘下の東西には連吾川と大宮川が流下し、段丘面上は舌状の平坦地を呈する。遺跡周囲の標高は約110mで、段丘下との比高は約30mである。同じ段丘面上の南端付近には、弥生時代後期から古墳時代に継続する南貝津遺跡、前方後方墳の断上10号墳(全長約50m)が立地する。連吾川に面した段丘下には、平安時代・鎌倉時代を中心とする加原遺跡、大宮川に面した段丘下には、弥生時代後期・古墳時代前期の遺跡である吉竹遺跡が立地する。なお、石座神社は式内社で、神社境内においては、過去に中世の瓦が採集されている。

調査の概要 今年度の発掘調査は、段丘面東半の北斜面側を対象とした。調査の結果、弥生時代後期・古墳時代前期、奈良時代、中世・戦国時代の遺構と遺物が確認された。

弥生時代後期・古墳時代前期 弥生時代後期・古墳時代前期は、本遺跡の主体となる時期である。この時期の遺構として、竪穴住居2棟、大溝2条等の遺構を確認した。

竪穴住居016SI・121SIは、丘陵頂部の縁辺付近に分布する。平面形は、長辺4～5mの方形を呈する。016SIは、中軸線上のやや偏した位置に支柱石を配した地床炉を敷設し、その近辺に貯蔵穴様の土坑を配する。121SIは、中軸線上のやや偏した位置に地床炉を配する。竪穴住居からは、S字甕を含む台付甕、平底甕、加飾広口壺、有段高杯、小型鉢等の土器がややまとまって出土し、121SIの床面付近からは、筋砥石が出土した。

大溝020SDは、丘陵頂部から丘陵斜面にかけて流下し、丘陵の頂部から斜面にかかる地点で急激にその幅と深さを増す。規模は幅が1.6～4.5m、深さが0.2～1.2mである。大溝128SDは、調査区西部の谷に面した東斜面を流下し、溝の形状や溝内の堆積状況は020SDと類似する。規模は、幅が約3.5m、深さが約0.4mである。これらの大溝の上層に包含される遺物は古墳時代前期までの遺物に限られること、020SDが奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物に先行することから、大溝は古墳時代前期には埋没していたと推測されるが、遺構の性格は判然としない。

また、丘陵頂部や斜面には高位段丘の礫層に由来する礫群001SSが検出された。001SSには、手捏ね土器を含む土師器片が混在し、正位で埋設された土師器甕も認められる。礫の不自然な分布状況からも礫群には何らかの造作が加えられていることも推測されるが、礫による明確な単位や区画は認められなかった。なお、礫が分布する丘陵頂部(調査区外)には、径約7m、高さ約1mの円墳状の高まりが残存している。

**奈良時代** 奈良時代の遺構・遺物は、調査区東部の丘陵東斜面に局所的に分布する。斜面側には幅約1.2m、深さ約0.3mの溝010SDが掘削され、溝による区画内には、3棟の竪穴住居と、5棟前後の掘立柱建物が配される。竪穴住居は、いずれも北辺に竈を付設し、竈の右側に貯蔵穴様の土坑を配する。竪穴住居019SIは、特に残存状況が良好で、竈は天井と煙道の一部も残存していた。また、南西隅の床面付近には、須恵器蓋が正位で残されていた。掘立柱建物1は、桁行4間・梁間3間以上のやや大型の建物である。

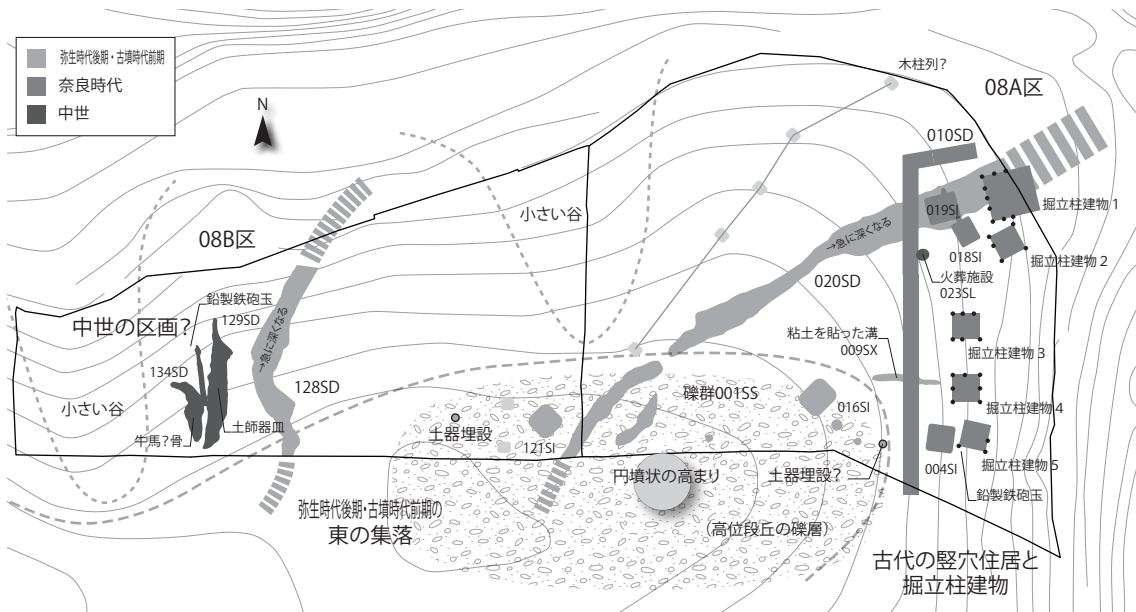
**中世・戦国時代** 中世・戦国時代の遺構として、調査区東部の丘陵東斜面において、火葬施設1基(023SL)、調査区西部の谷地形の東岸付近において、数条の溝(129SD等)が確認された。火葬施設023SLは、径約1.5mの円形(隅円方形)の土坑の両端に通風口となる突出部が付された形状で、通風口付近、土坑の床面と壁面は著しく熱変化していた。土坑内には、多くの炭化材が残されていたが、骨片、その他の遺物は何ら認められなかった。また、谷地形東岸付近の溝129SDからは、ロクロ調整土師器皿、溝134SDからは、牛馬骨、渡来銭(淳化元寶)が出土した。

**まとめ** その他、鉛製の鉄砲玉2点が、調査区東部の丘陵東斜面、調査区西部の谷地形の東岸付近からそれぞれ出土した。いずれも表土直下からの出土で、時期の推定は困難である。

今年度の発掘調査の結果、弥生時代後期・古墳時代後期の集落域が、段丘面上の東端付近にまで及んでいることが明らかとなった。ただし、遺構・遺物の分布はごく限られ、大溝や礫群に対する造作の程度、目的には明確でない部分も多い。付近の空間利用の状況について、今後、遺跡全体を通じた検討が必要である。

奈良時代には、丘陵斜面に集落が設営されるが、遺構の配置状況、遺物の包含状況から、集落はごく短期間の居住を目的としたものと思われる。その背景については、段丘下に立地する加原遺跡、石岸遺跡等の動向も踏まえる必要がある。

中世・戦国時代は、特徴的な遺構と遺物が、局所的に分布する。このことから、調査区周辺はやや特異な空間として、散発的に利用されていたことが理解される。(早野浩二)



石座神社遺跡遺構配置図(1:1,000)



遺跡遠景(北から)



遺跡遠景(東から)



O8A区全景



O8B区全景



丘陵頂部の礫群O1SS



礫群O1SS中に埋設された土器



大溝O20SD



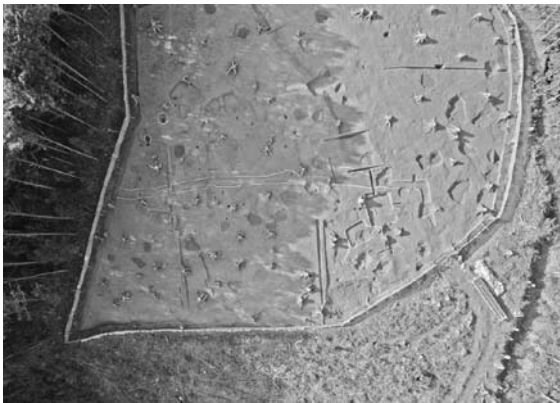
竪穴住居O16SI



竪穴住居 121SI



竪穴住居 121SI出土遺物



丘陵東斜面の奈良時代の遺構



掘立柱建物1



竪穴住居 019SI



竪穴住居 019SI出土遺物



火葬施設 023SL



溝 129SD出土遺物